大学の教員養成課程コースにおける行事「音楽会」の意義と課題

室町　さやか

キーワード : 音楽会，行事，KJ 法，教員養成課程

はじめに

小学校教育において「音楽会」は「特別活動」における「学校行事（2）文化的行事」として位置づけられ[(1)]，我が国において広く行われている。音楽会を含む諸所の学校行事は各教科と深い関わりを持つものとされており，「児童が日常の学習や経験を総合的に発揮し，発展を図る教育活動であり，各教科等では容易に得られない体験活動[(2)]」であることが述べられている。じっさいに，コロナ禍以前の平成 30 年度に行われた調査の結果では，小学校の学校行事に充てる年間授業時数の平均が 53.5 時間となっており，多くの時間が学校行事に充てられていることが分かる[(3)]。

しかしながら，教員を目指す学生が多く所属する大学の教員養成課程においてこれらの行事が実施されている例は少ない。実施された行事を通じて学生がどのような学びを得たか，教員を目指す学生たちに対して行事を経験することにどのような意義があるのかを明らかにした研究はさらに寡少であり，研究の蓄積が待たれるところである。本研究では，長年にわたり教員養成課程における行事「音楽会」を継続してきた A 大学の取り組みに着目した。小学校と幼稚園の一種免許状が取得可能な A 大学の初等教員養成課程では，学生主体の行事「音楽会」と「運動会」を教師に必要な行事運営を学ぶ機会として，あるいは行事を通じて教師としての資質・能力を育むことを目的として毎年一度交互に実施しており，2022 年度には 4 年ぶりに第 35 回の音楽会が実施された[(4)]。本研究では，行事「音楽会」を経験した 1 年生を対象に調査を行い，その意義と課題を検討した。

1. 大学の教員養成課程における学生主体の行事

大学教育においても入学式や卒業式など，様々な行事が行われていることは周知の事実である。また多くの大学で催される大学祭は，学生で構成される実行委員会が主体となって企画・運営を行うという形で広く実施されている。しかしながら，教員養成課程の学生がみずからの進路を見据え，教師としての力を付けることを目的として行われる行事はほとんどない，あるいは積極的に広報されていないのが現状である。

例を挙げると，保育士と幼稚園教諭を養成する B 大学の幼児教育課程では，2004 年度より学科特別行事として，卒業後に幼児教育に携わる学生の資質向上を目的として創作劇の発表を行っている[(5)]。B 大学の特別行事はカリキュラム外の扱いであり，1 年生は秋学期のベーシックセミナーの授業において制作作業と鑑賞会に 3 コマを用いるが，あとは自由意志で有志として参加をする。2 ～ 4 年生までは有志として参加をし，総リーダーは 3 年生が務めて全体をまとめるという形で運営されており，2016 年の参加者は 226 名（1 年生 139 名，2 年生 27 名，3 年生 55 名，4 年生 5 名）と発表されている[(6)]。行事を行っている学科の 2016 年度の入学者数が 141 名であることから，1 年生はほぼ全員参加していること，2 年生以上の有志の参加が在籍者数と比較して少なくなっていることがわかる[(7)]。2019 年度からは，この学科行事のための企画力及び実践力を身につけることを目標とした科目「表現技術の基礎」が新設されたことからも，この行事が学科の特色として考えられていることが明らかである[(8)]。また C 大学の幼稚園教諭養成課程では，音楽を通して子どもたちとの交流を行う行事が 60 年以上継続されている[(9)]。この行事は学生が企画から運営までを行っており，じっさいに子どもたちと触れ合い，様々な遊具や音楽あそびを通して子どもへの理解を深めることが目的とされている。

本研究が対象としている A 大学初等教員養成課程のコース行事「音楽会」は，授業科目ではなく学生主体の行事として位置づけられており，4 年生の実行委員会を中心に全学年の学生が行事の企画・運営を行い，

担当教員はそのサポートを行うという形で実施されている。実行委員会は前年に立ち上げられ，開催年度の 4 月にはコースの学生全員が「企画部」「会計部」「渉外部」「会場設営部」など，行事運営を分担する部門に配置されるが，この学生の配置も実行委員会が主体となって行われる。2022 年 9 月中旬に実施された音楽会では，各学年で合唱と合奏を 1 曲ずつ行い，小学生向けの音楽作品から歌唱・演奏する楽曲を学年ごとに話し合って選択した（表 1）。音楽会では発表に向けて練習を重ねることが必要とされるが，行事以外の学生の学びや生活への影響を考慮してクラス全員で集まる練習は本番がある 9 月から行われ，それ以前は個人や少人数での自主練習とされた。また本番は学内のホールで実施され，2022 年度は初めての試みとして近隣の小学生 12 名とその保護者を招待し，児童担当の学生がファシリテーター的な役割を果たすことで子どもと学生が各学年の演奏を通じてコミュニケーションを取れるようなプログラムの企画・実践を行っている。

表 1）2022 年度音楽会演奏楽曲

学年	合唱曲	合奏曲
1	「栄光の架け橋」北川 悠仁 作詞・作曲	「情熱大陸」葉加瀬 太郎 作曲
2	「かわらないもの」山﨑 朋子 作詞・作曲	「ホールニューワールド」アラン・メンケン 作曲
3	「COSMOS」ミマス作詞・作曲	「パフ」P. ヤーロウ　L. リプトン作曲
4	「ふるさと」小山 薫堂作詞，youth case 作曲	「リメンバーミー」クリステン・アンダーソン＝ロペス，ロバート・ロペス作詞・作曲

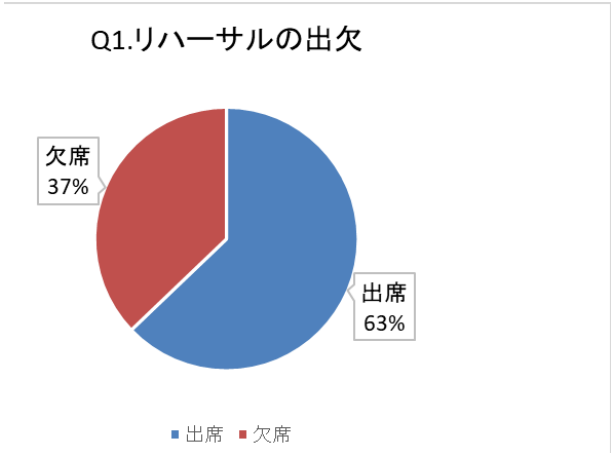
2. 方法と結果

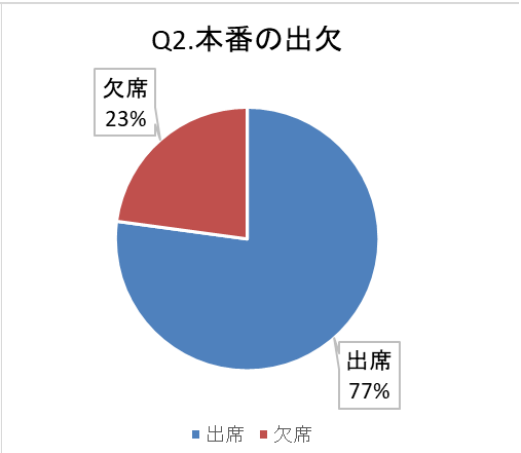
2-1）調査方法と倫理的配慮

音楽会が終わった後、2022 年 9 月に 1 年生 36 名を対象に音楽会についてのアンケートを行った。本研究を行うにあたり，学生にはアンケートの内容を個人を特定できない形で教育及び研究の場で発表すること，研究に協力できない場合もいかなる不利益も生じないことを口頭及びアンケート画面で説明し，承諾を得た。アンケートはクラウド型教育支援サービスのアンケートを利用して回答の収集を行い，35 件の回答を得た。また最後の自由記述回答に関しては，KJ 法 (10) を用いて分析し，文章データをラベル化して分類し，学生が抱えている課題を明らかにした。

2-2）集計結果

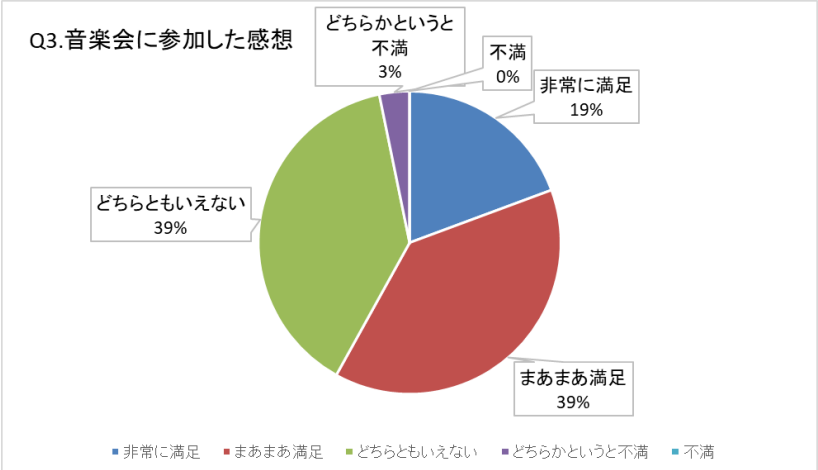
Q1，Q2，Q8，自由記述は回答のあった学生全員分を集計し，分析を行った。Q3 ～ Q7 に関しては，実際に音楽会に参加しないと回答のできない設問であるため，リハーサル，本番ともに欠席し，練習に「あまり参加しなかった」「参加しなかった」と回答した 11%（4 名）の学生の回答は除外して集計し，分析を行った。

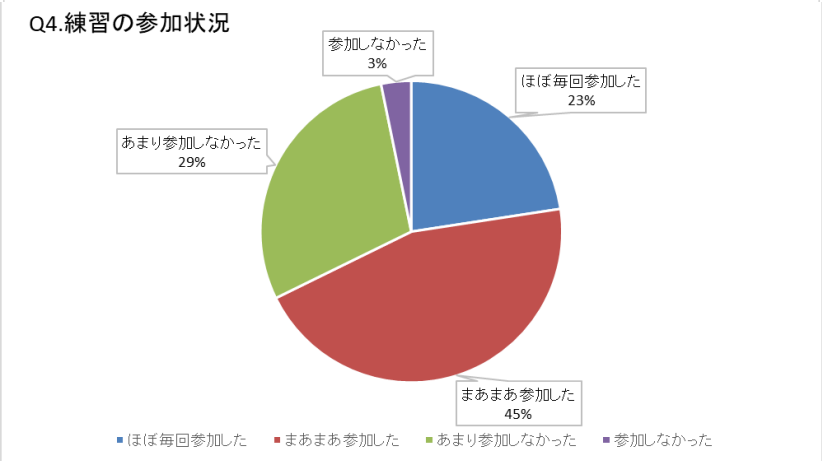




Q1 と Q2 は，音楽会リハーサルと本番の出席状況を尋ねたものである。リハーサルは本番と同じ舞台を使用し，本番のおよそ一週間前に行われた。舞台の入退場や楽器の配置などをじっさいに行う唯一の機会

であったが，4 割近くの学生が欠席しているため，当日の進行にはリハーサル参加学生の多くのフォローが必要であったことが推察される。

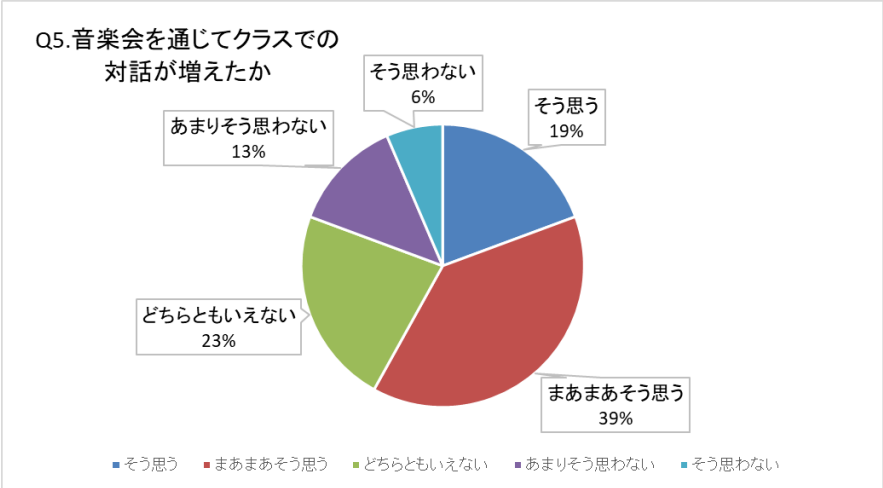


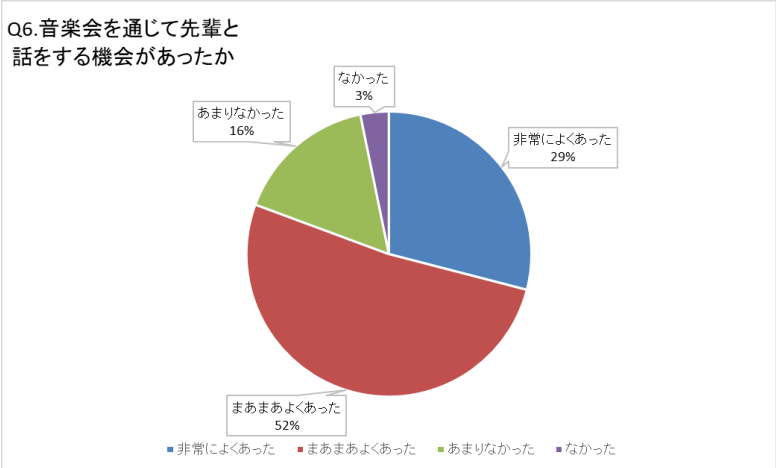


Q3 では，音楽会に参加した感想として「非常に満足」「まあまあ満足」と感じている 1 年生が 58% であることが分かった。また「不満」と回答した学生は 0%,「どちらかというと不満」と回答した学生は 3% であった。

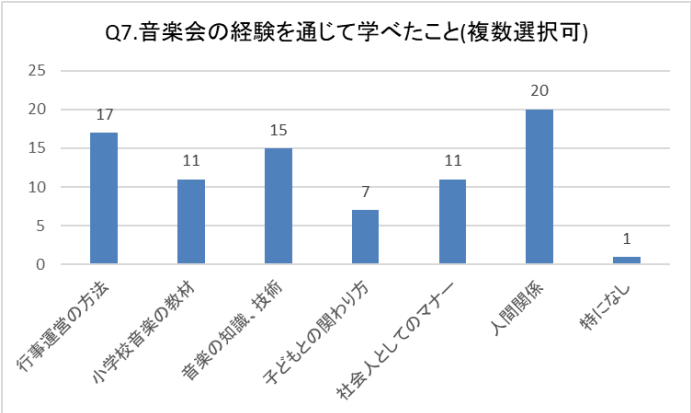
Q4 では練習状況を尋ねている。音楽会で合唱や器楽演奏を行うためには事前に練習することは不可欠である。また，歌唱，器楽演奏ともに，一夜づけで出来るものではないことは論を待たない。このような理由から，音楽会に向けての練習のスケジュール調整が出来なかったり，練習そのものを負担に感じたりする学生がいることは充分に考えられる。練習に「ほぼ毎回参加した」「まあまあ参加した」と回答した学生は 68% であった。「あまり参加しなかった」と回答している学生は 29% おり，「練習に参加しなかった」学生は 3% であった。本設問は「リハーサル，本番ともに欠席し，練習に “あまり参加しなかった”，“参加しなかった”」学生の回答以外は集計されているため，上記の 3% の学生は練習に参加しない状態で少なくともリハーサルか本番のどちらか一方には出席していることが分かる。

Q5 は音楽会を通じてクラスの対話が増えたかどうかを尋ねる設問であり，「そう思う」「まあまあそう思う」と回答した学生が 58% であり，「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した学生が 19% であった。半数以上の学生が「クラスの対話が増えた」と感じている一方，音楽会は企画から運営までが学生主体で行われているため，1 年生とはいっても曲決めや練習日程の調整，各部門からの連絡など，クラス内で協議したり必要事項を伝達したりする頻度は高いと考えられる。このことから，58% という数字は決して高いものではなく，クラス内での対話がより必要とされている状況であると言える。





Q6 では，「音楽会を通じて先輩と話をする機会があったか」という設問に対して，「非常によくあった」が 29%，「まあまあよくあった」という回答が 52% であり，81% の学生が行事の企画・運営を通じて先輩と話をする機会が持てたことが明らかになった。大学教育における他学年との交流については授業科目に対する意欲の向上などが報告されているが [11]，所属学生の多くが教員を目指す A 大学の初等教員養成課程コースにおいては，同じコースに所属する先輩との交流は，将来的な同業の先輩との関係構築を意味すると言える。また國田らは，保育士離職防止のひとつの視点として「若手保育士と中堅保育士の交流のしやすさ [12]」を挙げており，他の保育者などへの相談や研修会への参加によって他者の意見や助言に触れ，自らの保育を見直すこと，さらには自らの保育についての安心感を得られることが，保育者のやりがいを支えているということを明らかにしている。小学校教員においても，年代の近い教師同士で相談したり意見を交換し合ったりすることが仕事を継続する上での助けになることは充分に考えられることであり，初等教員養成課程在学中から異なる学年で交流することで，将来的に年齢の近い同業者となる可能性がある他学年の学生同士が音楽会を通じて交流を持つことは大いに意義があると言える。

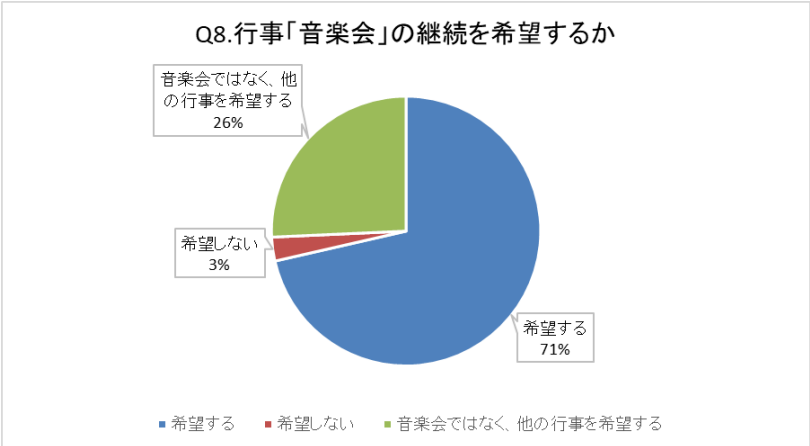


Q7 の回答でもっとも多いのは，「人間関係」であり，「特になし」と回答した 1 名以外は上記の選択肢のうち何かしらの学びを得ていることが分かった。社会において人間関係の調整能力やコミュニケーション能力が必要とされることは論を待たないが，とりわけ小学校教員には児童，保護者，同僚である教師たちとの連携が重要であり，コミュニケーション力は「教員育成指標の内容を定める 7 つの観点」のうち，「(1) 教職を担うに当たり必要となる素養に関する事項」に含まれるとされている [13]。また小学校，中学校，高校の教員に質問紙調査を行い，教員が教職課程の学生に求める社会性・対人関係能力について明らかにした原田と渡辺の研究では，教職課程の学生のシーシャルスキルトレーニング（SST）の必要性が論じられている [14]。これらの人間関係能力については大学の日常的な授業のみで養うことは困難であることが推測されるが，「音楽会」という学生が企画・運営を全て担う行事の遂行の過程で，お互いの対話や齟齬を通じて学ぶことができたのではないかと考えられる。

次に多かったのは「行事運営の方法」であった。今日再整理が進められている「教師に求められる資質･能力」では，横断的な要素として「マネジメント」が挙げられており，「学校組織マネジメント」の内にはタイムマネジメント，情報管理，施設設備管理，人材育成（職能開発），学校安全（リスクマネジメントを含む）が列挙されている [15]。2022 年度の音楽会において，学生たちがこれらのマネジメントを発揮した場面と具体的な仕事内容を整理したものが図 1 である。ここに示されているように，学生たちが音楽会の行事運営を通じて様々な場面で「教師に求められる資質・能力」のひとつである学校組織運営に必要なマネジメントの訓練を行っていることが明らかである。

図 1）音楽会における学生たちのマネジメントと主な仕事内容

音楽会の継続希望を問う Q8 の選択肢は，音楽会の継続を「希望する」，「希望しない」，「音楽会ではなく他の行事を希望する」の 3 つであり，以下の結果が得られた。



2-3）自由記述の KJ 法による分析

本項では，質問紙調査の自由記述を KJ 法を用いて分析している。KJ 法は，雑多なデータをラベル化して分類し，課題を明らかにするものである。分析の結果，自由記述の文章から 82 のラベルが生成され，グループ編成の結果 35 の小カテゴリー，24 の中カテゴリー，7 の大カテゴリーに分類された（表 3）。この分析結果を図解化したものが図 2 である。なお，図表ともに大カテゴリーは【　】で，中カテゴリーは「　」で書き表されている。

表 3）KJ 法による自由記述の分類

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー（ラベル数）	ラベルの一部
【協働】	「協働することの喜び」	みんなで作り上げることが楽しい（2）	・みんなで何かすると言うことがとても楽しいことを思い出しました
		参加者で団結できた（2）	・話したことない人とも喋れる機会がありよかった。
	「普段話さない人と話せた」	普段話さない人と話せた（1）	・色々発信しましたがクラスのグループでは返信は無し，不安なことばかりでした
	「クラスの連絡についての課題」	クラスの連絡についての課題（2）	・みんなで一つものを作り上げることに対しての志を一人一人が今一度考え，見直す必要があるのではないか
	「みんなで協力してやりたい」	みんなで協力してやりたい（6）	
【学生の行事に対する意識の差】	「参加率の低さ」	練習の出席率が悪い（2）練習に出ずに本番だけ出る学生への思い（2）	・練習への出席率が悪く，なかなか音楽として成り立ちませんでした
	「行事をやりたい学生とそうではない学生の温度差」	行事をやりたい学生とそうではない学生の温度差（4）	・なんであの子は練習には一度も来ないで本番だけでるの？
			・素直に頑張ってる人が不真面目な人達に冷たい目で見られてやる気が無くなるのは，おかしいと思うしメンタル的にも来るものがある
【参加しなかったことへの後悔】	「参加した方が良かった」	参加せず申し訳なかった（1）	・練習に参加できない分家で自主練習はしていたが，当日の流れ等を理解するためにはリハーサルは出るべきだと思った
		練習に参加すべきだった（2）	・写真を見るとみんな楽しそうだったし先輩との交流もあったようだったので，来年は参加したい
	「練習への参加が不充分だった」	あまり練習に参加できなかった（2）	・本番も休んでしまって真面目に練習をしていた人に申し訳ない気持ちでいっぱいだった
		あまり協力できなかった（1）	
		練習の不足（1）	
	「次回は参加したい」	次回は参加したい（1）	
【自分たちの演奏】	「継続的な努力の必要性」	次はもっと練習したい（2）	・次の音楽会では，前もって練習をして完成度の高い発表をしたい！
		日々努力する（1）	・自分たちはもちろん子どもが楽しめるような曲選びができたらもっと良かった
	「選曲の反省」	選曲をもっと考えたい（5）	・リハーサルから比べるとみんなと協力しながら頑張れたと感じました
		自分たちの音楽の技能（1）	
	「努力した結果」	リハーサルと比較して良くなっていた（2）	

【学生の主体性】	「自分たちの音楽会」	自分たちでやる音楽会（3）	・個々の係の仕事を責任もって行うことや，練習への参加が音楽会に大きな影響や責任があることを感じることができた ・楽曲を決めるところから学生のみで行うことに意味を感じた ・先輩たちの演奏には小学生をとても楽しませる工夫だけでなく，この行事を成功させるために柔軟に対応して行動する姿がカッコよかった
		自分たちの個性を出したい（1）	
	「手本となる先輩の姿」	先輩たちの選曲（3）	
		先輩たちのかっこ良さ（1）	
	「先輩たちに迷惑をかけた」	先輩たちに迷惑をかけた（1）	
	「行事運営の責任」	児童の対応（2）	
		仕事は楽ではなかった（1）	
【行事についての希望】	「行事開催の頻度や日時」	行事開催の頻度や日時（2）	・球技大会がやりたかった ・これからもこのような行事は続けて欲しい ・音楽会の継続は個人的には反対です。
	「行事の継続」	行事の継続（2）	
	「音楽会以外の行事を希望」	音楽会以外の行事を希望（3）	
【音楽会の感想】	「楽しかった」	（高校又は中学ではなかったので）久しぶりの音楽会で楽しかった（3）	・難しかったり，悩むところも多々あったが最後までやりきることができてよかった。 ・皆とやる行事はすごく楽しかった ・最初は，音楽祭が楽しみで仕方がなかった・正直心から楽しめたかと言われると首を縦に振ることはできません ・次回の音楽祭では，上級生として後輩たちを引っ張っていけるよう精進していきたい ・特になし
		楽しかった，やれて良かった（5）	
	「楽しめなかった」	心から楽しめなかった（1）	
	「次はもっと良いものにしたい」	次はもっと良いものにしたい（6）	
	「最初は期待していた」	最初は期待していた（2）	
	「特になし」	特になし（1）	

図解化すると，【学生の行事に対する意識の差】が，音楽会を実行する過程で課題となっていることが導き出された。「参加率の低さ」や「行事をやりたい学生とそうではない学生の温度差」は，【協働】を望む学生とは相反するものであり，【自分たちの演奏】に影響を及ぼし，【参加しなかったことを後悔】する気持ちや「みんなで協力してやりたい」という思いに繋がっている。この【学生の行事に対する意識の差】は，「楽しめなかった」のような【音楽会の感想】の一因となっていることが推測される。

一方で，行事を通じて【自主性】が形成されていることが分かる。【自主性】は「手本となる先輩たちの姿」などの他学年との関係や，自分たちの「行事運営の責任」を果たす中で形成され，自分たちが主体となって「自分たちの音楽会」を開催して【自分たちの演奏】を行うということに繋がり，「次回はもっと良いものにしたい」という思いや，「選曲の反省」や「継続的な努力の必要性」など次回への具体的な課題意識に繋がっている。

【協働】についてはクラスの連絡などの課題を残しながらも「普段話せない人と話せた」り，「協働することの喜び」を感じることが出来たように見受けられる。これらの要素は，【音楽会の感想】のうち「楽しかった」という感想に繋がると考えられる。また【行事についての希望】では，日時や頻度などの「行事開催の希望」や「音楽会以外の行事をやりたい」という希望が挙げられた。

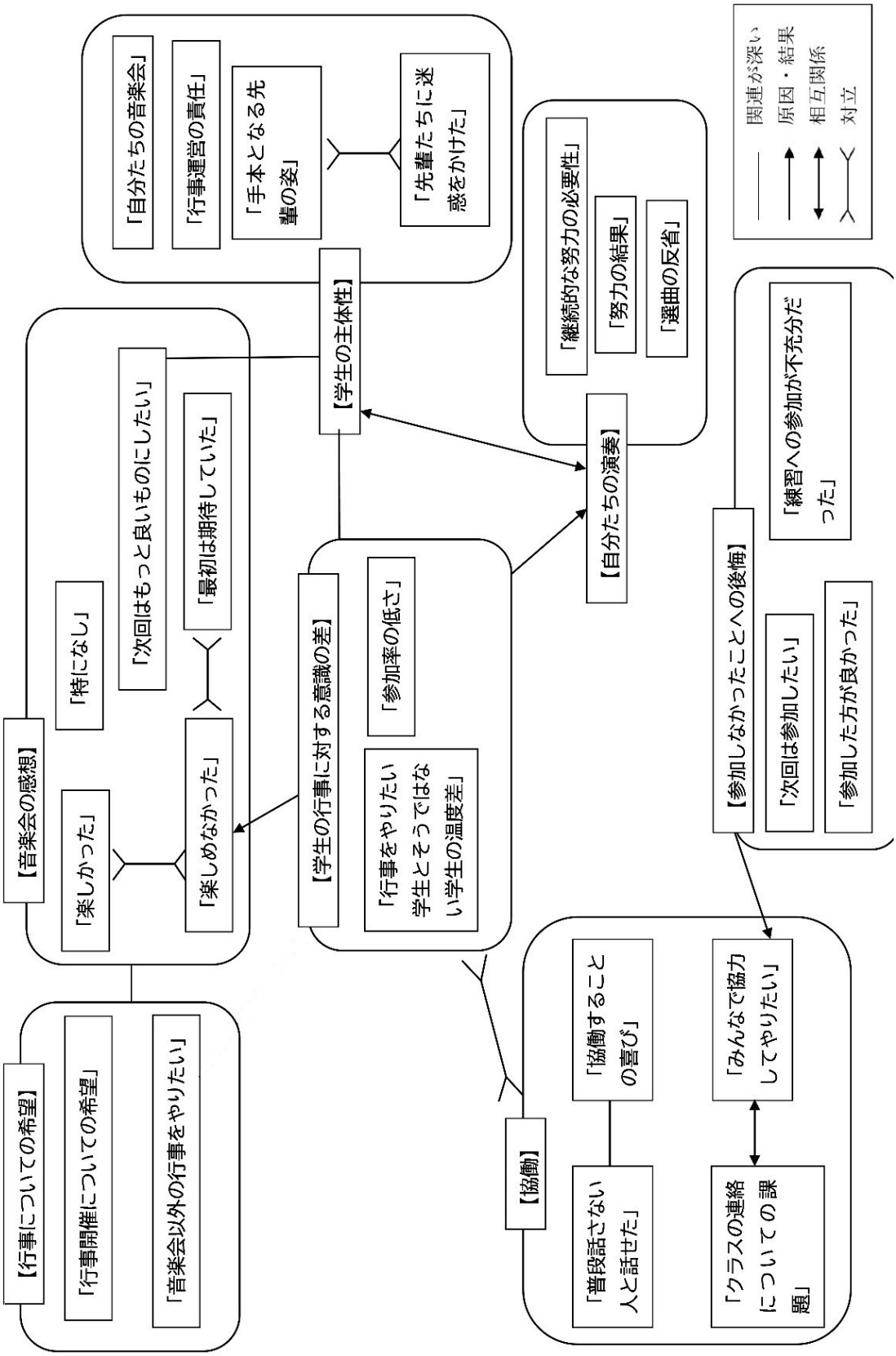
2-4）不参加の学生

35 件の回答のうち，リハーサル，本番ともに欠席し，練習に「あまり参加しなかった」又は「参加しなかった」と回答したのは 4 件であった。記述から分かる不参加の理由は，「体調不良」が 1 件，「コロナワクチン接種」が 1 件，「練習，本番ともに参加できない」が 1 件，「参加していないため」が 1 件であった。また音楽会の継続については，「希望する」が 1 件，「希望しない」が 1 件，「他の行事を希望する」が 2 件であった。少なくとも「他の行事を希望する」2 名については，音楽会以外の行事に参加する可能性はあると考えられる。

3. おわりに

本稿では，大学の初等教員養成課程コースにおける行事「音楽会」の意義と課題について，音楽会を経験した 1 年生を対象に検討した。分析によると，行事を通じた学生たちの学びのうち，「コミュニケーショ

図 2）自由記述にみる音楽会の課題



ン能力」と「学校組織マネジメント」に大きな効果があることが分かった。また行事の企画・運営を通じて将来的に同業者となる可能性のある同じコースの先輩との関係が構築されていることは，在学中だけではなく卒業後を見据えても有意義である。

自由記述からは，【学生の行事に対する意識の差】が課題となっていることが読み取れた。所属課程の学生全員で作り上げるとされてはいるものの，「行事に参加したい学生」と「行事に参加したくない学生」がいるのは当然のことであり，授業外の教育的プログラムに強制的に参加させることは出来ない。また，家族の介護を抱えている，家計を担う必要がある等，やむを得ない事由で参加できない学生がいることも理解しなければならない。全員が同じ意志を持って行事に取り組むことは不可能であるが，現状では【学生の行事に対する意識の差】が多くの物事に影響し，音楽会を実施する過程で学生に悩みを生じさせている一因となっていることが明らかである。また Q8 の結果に見られるように，音楽会以外の行事の実施によって，【学生の行事に対する意識の差】が減少する可能性も考えられる。1 年生の 71% が音楽会の継続を希望している一方, 希望しない学生, 他の行事を希望する学生がほぼ 3 割にあたることを軽視するべきではない。行事の目的が特定の科目の知識技能を身につけることではなく，教師になるにあたって必要となる力を身につけるということであるならば，音楽会以外の行事の開催を検討することも視野に入れる必要がある。

いずれにしても西田らが述べているように，カリキュラムに含まれていない学生主体の行事に対する教員の立場は「見守り」である[16]。教員の介入は行事を通じて形成される【学生たちの自主性】を損ねてしまう可能性もあり，慎重に行わなければならないものであるが，行事を通して培われる教師の資質・能力を具体的に示す，課程における行事の意義を明確にするなど, 学生が行事に参加するための動機づけを行うことは有益であると考えられる。

【引用・参考文献】

(1) 部科学省 2017『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版社 , pp.121-122.

(2) *Ibid*., p.35.

(3) 文部科学省 2019「平成 30 年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査調査結果」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/04/10/1415063_2_1.pdf, p.5.（2022 年 12 月 5 日アクセス）.

(4) 2018 年度に第 34 回音楽会が開催されているが, 2019 年～ 2021 年まではコロナ禍のため運動会, 音楽会とも開催はなかった。

(5) おかもとみわこ 2017「学内論説 保育者養成校における主体的な学びの場 子ども学科特別行事「まみむめめじろ かきくけこども」」『人と教育：目白大学教育研究所所報』第 11 号 ,p.11. 論文中では大学名が記されているが，本稿では筆者がアルファベットに置換している。後述の C 大学の記述についても同様の措置を行っている。

(6) *Ibid*., p.12.

(7) 目白大学 2016「目白大学・目白大学短期大学部入学定員，入学者数，収容定員及び在籍者数平成 28 年 5 月 1 日現在」https://www.mejiro.ac.jp/gakuen/pdf/h28_stdnts_enrolled.pdf（2022 年 12 月 5 日アクセス）.

(8) 西田希 , 三森桂子 , おかもとみわこ 2022「制作発表を手がかりとした学生の学びと成長―表現技術と非認知能力に着目して―」『目白大学高等教育研究』第 28 号 , p.57.

(9) 国立音楽大学 2015「国立音楽大学　自己点検・評価報告書　2015 年度」https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/Accreditation/houkokusho_2015.pdf, pp.48-49, 62.（2022 年 12 月 9 日アクセス）.

(10) 川喜田二郎 2017『発想法』中央公論新社 .

(11) 坂倉真衣 , 渡邊耕ニ , 堀友歌 , 平原桃花 , 森川友梨奈 , 西村まりあ , 吉田椿 2020「初等教育教員養成課程に在籍する学生の理数科指導力向上を目指した取り組み―学生が運営する「理数科教育基礎ゼミ」の成果と展望―」『宮崎国際大学教育学部紀要』第 7 号 , p.66.

(12) 國田祥子，槙尾真佐枝 2020「保育者のやりがいは何によって支えられているのか」『中国学園紀要』第 19 号 ,p.146.

(13) 文部科学省 2021「教師に求められる資質能力の再整理について」https://www.mext.go.jp/kaigisiryo/content/20210803-mxt_kyoikujinzai01-000017240_3.pdf, p.12.（2022 年 11 月 14 日アクセス）.

(14) 原田恵理子，渡辺弥生 2016「教職課程の学生に求められるソーシャルスキル」『教育実践学研究』第 19 号 , p.1-12.

(15) 文部科学省 2021, *op.cit*., p.18.

(16) 西田 et al. *op.cit*., p.63.